

新莽末における旧劉氏宗室の再生をめぐる

馬 彪

はじめに

- 1、新莽の打撃による劉氏宗室の没落
- 2、劉氏宗室の抵抗とその平民化
- 3、反莽戦争の指導者としての劉氏
- 4、「諸劉」の間における「内争」
- 5、「内争」による劉氏再生の実現

おわりに

はじめに

漢朝では前漢・後漢を問わず劉氏宗室は常に貴族であったが、一つの例外がある。それは前漢末王莽の建てた新王朝における劉氏である。前漢末期から後漢にかけての30年間には、前漢・新・後漢の三つの朝代を経て、劉王二氏の政権が交替をくりかえした。その間における劉氏宗室はどのような境遇にあっただろうか。ごく一部の劉氏は王莽に媚態をつくして地位を守ったが、ほとんどの劉氏宗室は新朝政権から激しい弾圧を受けて、平民よりも身分が低くなり、社会の底に落ちた。しかし旧皇室としての旧劉氏宗室は王莽末の乱の機会を得、後漢政権を成立した上で、ついに自分自身の再生を実現した。その経過について、『漢書』『後漢書』の記述は曖昧に終わり、今日まで漢代史研究の上で検討を要する課題となっている。

1、新莽の打撃による劉氏宗室の没落

従来の研究は、前漢末期から王莽時代にかけての劉氏宗室の社会的地位が非常に高かったとしているが、筆者はこの見解に賛成できない¹。これまで腐敗して平民までなり下っていた宗室は、王莽の「奪爵」「奪官」「奪姓」等の弾圧によって、さらに没落してしまった。彼らは朝廷では自分の劉姓さえ使えない官僚であり、地方では「郡県の侵す所と為」² った庶民であったという事

¹ 今日、日中両国の研究者たちは殆ど王莽時代の旧劉氏宗室に関して「豪族」「貴族」「大地主」というような身分と解釈している。

² 『続漢書』（『後漢書』安成孝侯賜列伝、李賢注、所引）に「為郡県所侵」とある。

実に対して、筆者は特に強い印象を持っている。彼らが反莽戦争に挺身した主な理由は、自分の政治的・社会的地位に満足できなかったことにあると考えられる。

劉邦は「布衣」として天下を取ると、秦朝滅亡の教訓に鑑みて、宗室に対して分封を行った。すなわち『漢書』諸侯王表序に、

漢興の初め、海内新たに定まり、同姓寡少にして、亡秦孤立の敗を懲戒し、是に於いて疆土を剖裂し、二等の爵を立つ。

(漢興之初、海内新定、同姓寡少、懲戒亡秦孤立之敗、於是剖裂疆土、立二等之爵。)

とある。漢初、朝廷が劉氏皇室に同姓諸侯王を分封した本来の意図は、彼らが中央政権を防衛する地方勢力と成り得ることを期待したのである。しかし、事は希望通りに進まず、諸侯たちはやがて墮落して、『漢書』諸侯王表序にあるように、小さい者は度をこえた荒淫に身を持ち崩し、大きい者は道にもとった行為で孤立してしまい、こうしてわが身を害し国を滅ぼした³。

前漢の末に至って、劉氏宗室の衰微はすでに救いようがなく、朝廷はしばしば「継絶した家を再興する」(興滅繼絶)という対策をとっても、何の役にも立たない。その宗室が衰亡するにつれて、外戚の強盛を招き、漢の成帝の時、すでに現れた外戚の王氏がとった「宗室を排除し、公族を弱体化する」(排擯宗室、孤弱公族⁴)という政策は、次のような状況を生んだ。

「今、王氏一姓だけで朱輪華轂の車に乗る者が二十三人おり、青紫の綬を帯び、紹蟬の冠をかぶる者が幄の内に充ちあふれ、帝の左右に居並ぶこと魚鱗のようである。大將軍は政事を乗り権力を用い、五侯は驕奢で、その盛大なこと身分を越え、彼らはいずれも威力をもって人を脅し、恩を着せ、法律をほしいままにして人を処断し、政治にかこつけて汚職を行い、そして公事に託して一身の利益を図り、東宮の尊貴をたのみ、帝の甥舅という親縁を借りて、威嚴を備えている。尚書・九卿・州牧・郡守は皆その一門であり、国家の枢機を管領し、徒党を組んで助けあい、他を排斥している。褒め称える者なら登用し、逆らい恨む者なら殺傷し、遊説の士はその説を助け、執権の者はそのために弁じている。宗室を排斥し、公族を孤弱にし、その智能ある者はこれを極力誹謗して進出させず。宗室としての任をになう者を遠ざけ、朝廷・禁中に給事することのできぬようにし、それがおのれと権力を分つことを恐れている。しばしば燕王や蓋主のことを誉めて主上の心に疑いを懐かせ、王氏のために忌み避けて呂氏・霍氏のことを言わない。内に管叔・蔡叔の萌があるとし、外に周公の論をかりて、兄弟たちは重権に拠り、宗族は結託す。上古以来秦・漢に至るまで、外戚が身分をこえて尊貴なこと、王氏ほどのものはまだかつてない。」⁵

³ 『漢書』諸侯王表序に「小者淫荒越法、大者睽孤橫逆、以害身喪國。」とある。

⁴ 『漢書』楚元王伝。

⁵ 『漢書』楚元王伝「今王氏一姓乗朱輪華轂者二十三人、青紫貂蟬充盈幄内、魚鱗左右。大將軍乘事用權、五侯驕奢僭盛、並作威福、擊斷自恣、行汚而寄治、身私而託公、依東宮之尊、假甥舅之親、以爲威重。尚書九卿州牧郡守皆出其門、筦執樞機、朋黨比周。稱譽者登進、忤恨者誅傷。游談者助之說、執政者爲之言。排擯宗室、孤弱公族、其有智能者、尤非毀而不進。遠絶宗室之任、不令得給事朝省、恐其與己分權。數稱燕王・蓋主以疑上心、避諱呂・霍而弗肯稱。内有管・蔡之萌、外假周公之論、兄弟據重、宗族磐互。歷上古至秦漢、外戚僭貴未有如王氏者也。」

しかし、本格的に宗室を排斥し、公族を孤弱にすることは、いわゆる「王莽篡位」から始まったのである。『漢書』王子侯表下に、

王莽位を篡い、絶者は凡そ百八十一人なり。

(王莽篡位、絶者凡百八十一人。)

とあるが、それはどのような人びとを指すのであろうか。この点の考証から出発し、本論の新莽時代における劉氏宗室の再生という課題の前提として追求してみたい。

「王莽篡位、絶者」とは、王莽の即位した新朝に劉氏宗室としての爵位を奪われた者であろう。筆者が『漢書』の「諸侯王表」と「王子侯表」を中心として考証し、一覧表を作成したものである(文末の表を参照)。この表から班固のいう「王莽篡位、絶者凡百八十一人」のうち、少なくとも四十七人が確認できた。「絶」と同様に考えられる言葉には「廢」「免」がある。

さらに、上文の内容を他の文献記録と比べて分析すると、特にいくつかの注目すべき点がある。それらの中の奪爵・奪官・奪姓という措置とその後の劉氏宗室の没落について以下に述べたい。

王莽は新朝を成立させると、速やかに「廢劉」という政策を打ち出し、したがって漢の宗室の殆どが致命的な打撃を受けた。『後漢書』光武紀には、後漢朝成立当初の劉秀の建武二年十二月戊午の詔があり、それには、

惟んみるに、宗室の列侯、王莽の廢する所と為り、先靈は依歸する所無し、朕甚だ之を愍れむ。其れ並びに故国を復せ。若し侯の身已に歿したれば、屬所は其の子孫の見名を尚書に上れ。封拜せん。

(惟宗室列侯為王莽所廢、先靈無所依歸、朕甚愍之。其並復故國。若侯身已歿、屬所上其子孫見名尚書、封拜。)

とあり、李賢の注には、

屬所、侯の子孫の所屬の郡県を謂うなり。其の見名⁶を録し尚書に上り、之を封拜す。

(屬所、謂侯子孫所屬之郡県也。録其見名上於尚書、封拜之。)

とある⁷。

この詔書から見ると、後漢政権は反莽戦争の勝利を得てから、急いで王莽に弾圧された劉氏宗室の「故国を復」し、侯爵を「封拜」したことが分かった。言うまでもなく、内戦に巻き込まれていた諸劉武装勢力に劉秀が見せたいのは、自分が本当の劉氏を再生する主だということである。しかし「故国を復」すとは再生を意味するので、劉氏の再生を目指した真の理由は、王莽の弾圧に因るものであろう。したがって「宗室の列侯、王莽の廢する所と為」ることは、反莽戦争が起こった要因と言える。では、王莽はどのように「廢劉」を行ったのであろうか。

まず、新朝建国に当たり、王莽が急いで実行した「廢劉興王」の政策は、『漢書』王莽伝中に、

⁶ 現在名のこと。

⁷ 袁宏『後漢紀』後漢光武皇帝紀には「詔曰、「維列侯為王莽所廢、先祖魂神無所依歸、朕甚閔之。列侯身廢者、國如故、身死、若子孫見在、令繼其先焉。」

「いま百姓はみな、皇天が漢を革めて新を立て、劉氏を廢して王氏を興した、と言っている。そもそも劉という字は、『卯・金・刀』で構成されており、正月卯の日に作ってお佩びた剛卯と金刀の利は、一切これを用いてならない。博く卿士に謀^{はか}ったところ、みなが、天人の相応ずること昭然として明らかであると言った。それ剛卯を捨てて身に佩^おびず、刀錢を廢して利の追求をやめ、天心を承^{したが}けこれに順い、民意をたのしませたい。」⁸ とある。また『後漢書』光武紀の范曄の言には、

王莽の位を篡うに及んで、劉氏を忌み悪み、錢の文に金刀有るを以て、故に改めて貨泉^づを為る。

(及王莽篡位、忌惡劉氏、以錢文有金刀、故改為貨泉。)

とあり、王莽が「惡劉」によって「廢劉」を願ったことは、貨幣改造にも表れていることが分かる。こうした背景を政治的に作り上げて、王莽は一連の「廢劉」の措置をとったのである。

その中で劉氏宗室に対する最も強い打撃は、始建国元年(9年)に、王莽が「其れ諸侯王の号皆公と稱するを定む。」(其定諸侯王之號皆稱公⁹)と策命し、また翌年には、さらに「漢諸侯王の公と為る者は、悉く璽・綬を上げ庶民と為り、命令に違う者無し。」(漢諸侯王為公者、悉上璽綬為民、無違命者。¹⁰)となった。例えば、下表の第一番「城陽王劉惲」から第二一番「信都王劉景」までの劉氏諸王たちは「王莽の位を篡うに、貶せられて公と為り、明年廢」(王莽篡位、貶為公、明年廢。)された。これはまさに始建国元年・二年に連続して起こった「廢劉」の結果である。同時期に「劉氏の侯と為る者は皆な降して子と稱し、孤卿の祿を食ましめ、後に皆な爵を奪う。」(劉氏為侯者皆降稱子、食孤卿祿、後皆奪爵。¹¹)という政策が行われている。これは、下表に第二二番から第四七番までの劉氏諸侯たちの殆どは「王莽、位を篡いて、絶す。」(王莽篡位、絶。)という記載と一致している。

それだけではなく、始建国元年(9年)に、王莽は「諸劉の郡守と為る者、皆徙して諫大夫と為」(諸劉為郡守、皆徙為諫大夫。¹²)し、このようにして、劉氏宗室の実権を奪ったのである。翌年、王莽はさらに劉氏の「其の吏と為る者は、皆罷め、家に於いて(遷)除を待たしむ。」(其為吏者皆罷、待除於家。)(顔師古曰く「其職を罷黜し、各の退歸せしめ、而して家に在りて遷除を待たしむを言う。)(罷黜其職、各使退歸、而言在家待遷除。))という措置を講じた。しかし、王莽の新政権を支持してきた劉歆・劉嘉など三十二人とその家族らは特例としてこれを優待した。「諸劉は三十二人と同宗共祖たる者は罷むる勿く、姓を賜いて王と曰う。」(諸劉與三十二人同宗共祖者勿罷、賜姓曰王。)このことを実施したとき、また国師の劉歆は「女を以て莽の子に配す。故

⁸ 『漢書』王莽伝中に「今百姓咸言皇天革漢而立新、廢劉而興王。夫『劉』之爲字『卯・金・刀』也、正月剛卯、金刀之利、皆不得行。博謀卿士、僉曰天人同應、昭然著明。其去剛卯莫以爲佩、除刀錢勿以爲利、承順天心、快百姓意。」とある。

⁹ 『漢書』王莽伝中。

¹⁰ 『漢書』王莽伝中。

¹¹ 『後漢書』城陽恭王祉列伝。

¹² 『漢書』王莽伝中。

に姓を賜わず。」(以女配莽子、故不賜姓。)(同上) この諸劉らが「勿罷」となった理由は「嘉新公国師は符命を以て予の四輔と爲り、明德侯劉龔・率礼侯劉嘉等凡そ三十二人は、皆な天命を知りて、或いは天の符を献じ、或いは昌言を貢し、或いは反虜を捕告し、厥の功は焉に茂す。」(嘉新公国師以符命爲予四輔、明德侯劉龔・率禮侯劉嘉等凡三十二人皆知天命、或獻天符、或貢昌言、或捕告反虜、厥功茂焉。)(同上) ということであった。

ここでは、以下の二つの点に注目すべきであろう。その一、新莽時代には殆どの劉氏宗室が「罷黜」されたり、「奪爵」されたりしたことは、決して一般的な官界の失脚と同一視できない。もし普通に官職や爵位を罷免され、庶民の世界に堕ちた場合であれば、手柄を立てれば復活できるはずである。しかし、政権を交替するために倒された政敵は、新政権が崩壊しなければ、復活できる機会は与えられないであろう。言い換えると、打倒された旧劉氏宗室は一般庶民のように貴族になれる可能性がないので、その社会的地位はむしろ普通の人間よりは低かったのではないか。

その二、新朝建立の始めに、王莽が性急に劉氏宗室に対して「奪爵」「奪官」した目的は、劉氏の朝廷内や官界に保有していた力を弾圧したかったのは言うまでもないが、注目すべきことはその「排擯宗室」という施策の中、打撃を与える一方で、利用するという策略を用いたのである。その新政権に屈伏して、投降した劉氏宗室は罷免しないが、それには一つの前提条件がある。それは「賜姓」という形で必ずこれまで持っていた劉姓を王姓に変えなければならず、以後は徹底して王氏のために忠節を尽くさなければならないのである。表向きでは「賜姓」という行為は度量の大きい王莽から恵まれたものとなっているが、実は劉氏はむしろ致命的な精神的打撃を与えられたとも言える。前漢末の劉氏宗室は、自らの腐敗によって、彼らの政権上の勢力はあまりにも弱かった。しかしかにな没落の運命をたどった宗室であったとしても、最終的には貴族的血統が残って、彼らの姓氏はその血統をあらわすことのできる符号であった。王莽が知恵をしぼってあらん限りのことをしようとしたが、それは結局その符号を消去して、血縁上でも政敵である劉氏を徹底的に取り除こうとしたのではないか。結論から言うと、劉氏宗室には、旧貴族の血縁符号を消去するか、官職を辞めて「家に在りて遷除を待つ」という二つの選択肢しかなかったであろう。言い換えると、一般の庶民出身の官僚でさえ自分の姓氏を守ることができるが、この時代の劉氏宗室はその権利をすでに失ってしまっていたのである。

旧劉氏は腐敗して、自分の政権でさえ守れず、新しい政治の主人の前に屈することとなった。自己の俸禄や地位の為に、彼らは奴隷根性によってへつらいの態度を取った者も少なくない。もちろん、一部の劉氏宗室は形式上では新政権に抵抗してみたが、すぐに失敗した。その結果は、むしろ彼らの無力さを改めて証明しただけである。

劉歆・劉嘉とも、王莽から「勿罷」とされていた劉氏宗室であり、二人はまた新朝に身を委ねた典型的な人物である。劉歆は劉向の子で、楚元王劉交の後裔である。彼は「少くして以て『詩』

『書』に通じ、能く文を属^つる」(少以通『詩』『書』能屬文¹³)のであった。王莽と同時期にともに黄門郎に任ぜられていた経歴をもち、王莽が即位すると、寵幸されて中壘校尉や国師に任命され、また娘は王莽の嫁であるという関係でもある。劉歆は摂政であった王莽に「安漢」や「宰衡」という尊号を賜い、彼の称帝する前に必要となった「符命」を作るという重要な役割を果たした。しかし、宗室として外戚を助け、劉氏の前漢朝を潰させた劉歆は決して心安らかではなく、班固は彼の心理を「爵位は已に盛にして、心意は既に満つるも又、実に漢宗室、天下豪傑を畏る。」(爵位已盛、心意既満、又實畏漢宗室、天下豪傑。¹⁴)と描いている。王氏からの恩恵を望む一方で、劉氏宗室や天下豪傑の懲罰を受けることを恐れている。これは中国史上、漢奸の第一人者である彼の心理をリアルに描写している。このような矛盾した心理において、後に劉歆は新朝の大勢がすでに去ったと判断して、反莽によって退路を見つけようとしたが、陰謀が発覚して自殺する結果となった。王夫之が「劉歆は小人なり」(『読通鑑論』巻五)と彼の人格を論じているのは、公平な論断である。

もう一人の宗室劉嘉は長沙定王の後裔で、安衆侯劉崇の族父である。居摂元年(6年)、劉崇が反莽の兵をおこして失敗したあと、劉嘉は自主的に王莽に謝罪し、その上奏の中で造反した甥の劉崇を「誠に臣子の仇、宗室の讎、国家の賊、天下の害なり。」(誠臣子之仇、宗室之讎、國家之賊、天下之害也。¹⁵)と痛罵した。これによって、劉嘉は連坐罪を免除されただけでなく、本人は帥礼侯やまた淑徳侯を加封され、「子の七人に皆な爵関内侯を賜う。」(子七人皆賜爵関内侯)(同上)こととなった。長安では劉嘉の厚顔無恥を風刺する謠言が生まれた。「戦闘に力むるは巧みに奏を爲すに如かず。」(力戦闘、不如巧爲奏。)(同上)。

王莽の時代には劉歆や劉嘉のように王氏に「或いは天符を献じ」、「或いは反虜を搏告し」た漢家宗室も少なくなかった。例えば、泉陵侯劉慶は上奏して、王莽の摂政案を提出し、広饒侯劉京は符命を献して王莽に称帝の要請をした。王莽の恩恵を受けて爵位・官職を「勿罷」された「諸劉」のなかには、劉歆と同様の「厥功茂焉」という者は三十二人に上る。このことから分かるように、当時、元の皇族劉姓を捨てても、実権を失っても新朝の朝廷臣子になりたいという劉氏宗室は決して少人数ではなかった。

2、劉氏宗室の抵抗とその平民化

王莽政権成立の前後、劉氏宗室のなかには抵抗を試みた人物がないとはいえないが、その新政権に身を委ねた者に比べれば、その人数はかなり少ない。その抵抗は規模が小さく、時間が短く、勢力が弱かったばかりでなく、民衆の支持がなかったのが、当時人心の向かうところではなかつ

¹³『漢書』劉歆伝。

¹⁴『漢書』王莽伝中。

¹⁵『漢書』王莽伝上。

たとも言えよう。反抗というより、むしろ瀕死のあがきと言ったほうがよい。

最も早い反抗は居摂元年(6年)四月に起きたものである。当時、平帝が没したものの実権を握っている大將軍王莽は新皇帝を立てず、2歳の劉嬰を太子として推戴しながら、自ら「安漢公」や「假皇帝」という称号で摂政を始めた。その際、

安衆侯劉崇は相の張紹と謀りて曰く『安漢公莽は朝政を専制し、必ず劉氏を危うくせん。天下之を非とする者、乃ち敢えて先んじて挙ぐる莫ければ、此れ宗室の恥なり。吾が宗族を帥いて先と為れば、海内は必ず和せん。』と。紹等従者百餘人、遂に進んで宛を攻め、入るを得ずして敗る。

(安衆侯劉崇與相張紹謀曰、「安漢公莽専制朝政、必危劉氏。天下非之者、乃莫敢先舉、此宗室恥也。吾帥宗族爲先、海内必和。」紹等従者百餘人、遂進攻宛、不得入而敗。¹⁶)

翌年九月、東郡太守翟義は宗室劉信を擁立して兵を起して、すさまじい勢いであったが、これは士大夫の意向による動きであって、劉氏宗室の反抗とは考えにくいであろう。新朝始建国元年四月、

徐郷侯劉快は党数千人と結び、兵を其の国に起す。快の兄殷は、故と漢の膠東王なり。時に改めて扶崇公と爲る。快は兵を挙げて即墨を攻め、殷は城門を閉じ、自ら獄に繋ぐ。吏民快を距^{ふせ}ぎ、快は敗走し、長広に至って死す。

(徐郷侯劉快結黨數千人起兵於其國。快兄殷、故漢膠東王、時改爲扶崇公。快挙兵攻即墨、殷閉城門、自繫獄。吏民距快、快敗走、至長廣死。¹⁷)

同年の冬、「真定の劉都等挙兵を謀りて発覚し、皆誅せら」(真定劉都等謀挙兵發覺、皆誅。)(同上)れ、また「陵郷侯劉会・扶恩侯劉貴等、更に聚って謀反」(陵郷侯劉会・扶恩侯劉貴等更聚謀反。)(同上)したという記録もあるが、詳しいことは明らかではない。

以上幾つかの劉氏宗室の「挙兵」という造反行動を見ると、反抗の無力さがよく表れている。人数の少ない場合は「数千」人、ないし「百余人」しかいない。動きは殆どたちまちのうちに起こりたちまちのうちに終わり、なお「挙兵を謀る」も「発覚」するケースもある。特に注目すべきは、彼らの反抗は民衆からの支持がなかっただけでなく、しばしばその民衆に冷眼を向けられたり、抵抗されたりすることである。安衆侯の劉崇は造反する前に、兵を起せば「海内は必ず和せん」と予想したが、宛城を攻める最初の戦いでも、「入るを得ずして敗れ」た。劉快の兵は即墨を攻めたが、兄の劉殷から城門を閉ざされて、「吏民が快を距」んだため、失敗した。「衆叛親離」というべきである。

類似することが当時にはまだ他にもあるかもしれないが、史書にははっきりと記されていないので、詳しいことは分からない。しかし、王莽政権成立の前後からしばらくの間は、劉氏宗室の

¹⁶『漢書』王莽伝上。

¹⁷『漢書』王莽伝中。

新政権への反発はまだ人心を得ていなかったという状況だったのではないか。その原因を追究すれば、一つはそのとき民衆はすでに前漢政権の支配に失望していたので、王氏の新朝が社会の生氣をとり戻すことに望みをかけていた。したがって、民衆はそれほど新政権の樹立に反対しなかったのではないか。二つ目は、劉氏宗室と王氏との戦いは、本来は朝廷内部、皇帝と外戚のあいだの政治闘争でしかないから、当時の民衆たちの生活にはそれほど関係がないので、民衆はむしろ無関心だったのではないか。まさに班彪がいうように「危は上より起こり、傷は下に及ばず。」（危自上起、傷不及下。¹⁸）であり、言い換えると、新莽時代末に発生した「民心は漢を思う」（「民心思漢」）という社会心理や世論など、この段階では、もしあったとしても強くはなかったのであろう。

前漢末、劉氏宗室は或いは自ら腐敗して貴族の身分を失い、或いは王莽から政治的弾圧を受けて民間社会に落ちたのである。このような旧劉氏宗室は恐らく王莽の朝廷に残っていた劉氏の人数よりずっと多かったと思われる¹⁹。前漢末から新朝までの約二十年の間に、この旧皇族らは編戸齊民になってしまい、ある意味では、彼らは時に一般の庶民より身分が低いように感じられる史料も見られる。実際、長いあいだ彼らは亡国の民として見られていたのである。

王莽時代、劉氏宗室の平民化という現象は相当に普遍的であった。当時における幾つかの旧劉氏宗室の履歴を見てみよう。劉盆子は太山郡式県の人で、城陽景王劉章の後裔である。『後漢書』劉盆子列伝には

祖父の（劉）憲、元帝の時封ぜられて式侯と為る。父の萌嗣ぐ。王莽の位を篡うや、国除かれ、囚って式の人と為る。

（祖父（劉）憲、元帝時封為式侯、父萌嗣。王莽篡位、國除、因為式人焉。）

とあって、父の「式侯」劉萌は王莽の弾圧を受けて、一般庶民の「式人」になった。このようなケースは、当時、政治的に迫害された「諸劉」のなかでただの一例にすぎない²⁰。また、劉永は梁孝王の後裔で、父の劉立は王国を嗣いだ。劉立は悪事の限りを尽くし、「一日、十一回法を犯すに至」った（一日至十一犯法）ので、「廢せられて、庶人と為」（「廢為庶人」）った²¹。劉立のように自ら腐敗して貴族の身分を廢止されて庶人と為った例も劉氏宗室には少なくないであろう²²。劉般は宣帝の玄孫で、楚孝王の後裔である。父の「（劉）紆は王の封を襲ぎしも、王莽の位を篡うに値うに囚って廢せられて庶人と為り、囚って彭城に家」（紆襲王封、囚值王莽篡位、廢為庶人、囚家於彭城。²³）った。

¹⁸ 『後漢書』班彪列伝。

¹⁹ 少なくとも『漢書』王莽伝にいう爵位や官職を剥奪された三十二人と比べれば、『漢書』王子侯表にいう「王莽篡位、絶者は凡そ百八十一人」とその家族の人数のほうがかなり多いことになる。換言すれば「絶者」のなかに王莽政権によって爵や職を奪われた外に、自らの腐敗によって絶滅した例も少なくないだろう。

²⁰ 袁宏『後漢紀』光武皇帝紀にいう、「〔建武元年〕盆子者、故式侯萌子。王莽時廢為家人。〔赤眉〕（更始）過式、略盆子與二兄恭・茂俱在軍中。〔崇等〕（更始）之詣洛陽、恭隨見南宮。」

²¹ 『漢書』梁孝王劉武伝・『後漢書』劉永列伝。

²² 袁宏『後漢紀』後漢光武皇帝紀にいう、「〔更始元〕 更始封劉永為梁王。永、故梁王子也。王莽時廢為家人、更始立、詣洛陽、故得封。」である。

²³ 『後漢書』劉般列伝。

劉秀は長沙定王劉發の後裔で、曾祖父の官職は太守に至り、祖父は都尉に至り、父の欽と、叔父の劉良はともに県令であった。母は南陽富豪の樊重の娘である。劉秀は

年九歳にして孤、叔父の良に養わる(中略)。性、稼穡に勤む。而るに兄の伯升は俠を好んで士を養い、常に光武の田業に事むるを非り笑い、之を高祖の兄の仲に比す。王莽の天鳳中、乃ち長安に之き、『尚書』を受け、略ぼ大義に通

(年九歳而孤、養於叔父良(中略)性勤於稼穡、而兄伯升好俠養士、常非笑光武事田業、比之高祖兄仲。王莽天鳳中、乃之長安、受『尚書』、略通大義。²⁴)

じていた。長安で『尚書』を学んだとき、

資用乏し。同舎生の韓子と錢を合して驢を買い、従者をして僦せしめ、以て諸公の費を給す。

(資用乏、與同舎生韓子合錢買驢、令従者僦、以給諸公費。²⁵)

兄の劉續は、

王莽の漢を篡いて自り、常に憤憤として社稷を復せんの慮を懐き、家人の居業を事えず、身を傾け産を破りて天下の雄俊に交わり結ぶ。

(自王莽篡漢、常憤憤、懷復社稷之慮、不事家人居業、傾身破産、交結天下雄俊。²⁶)

ことをしていた。

以上の史料によれば、当時の劉氏宗室の平民化現象について、幾つの特徴が指摘できるであろう。其一、前漢末から劉氏宗室には「廢せられ、庶人と為る」ことによって、庶民社会に落ちていく傾向がある。其二、没落した旧宗室のなかには「稼穡に勤ま」る人もあり、「長安に学ぶ」人もあり、游侠となった人もある。彼らは普通の庶民となってしまったが、その「常に憤憤として社稷を復せんを懐」いていたのは普通の百姓と相当に違う点である。其三、彼らは官僚の仕途に就けず、専門の技術もないために、うまく「居業」を営むことのできない人もある。旧宗室のなかで、何人かは富豪と婚姻関係を結んだが、それによって資産家になった例はない。彼らは「交結」を好んで、賓客を養っているが、それは「社稷を復せん」とする政治的な目的のためであって、経済的な意味からではない。実際に賓客と「交結」するために、「傾身破産」を惜しまないのである。

封国から朝廷まで失って没落した旧貴族は民間では不名誉な人間と見られる。劉氏宗室が何度造反しても応援してくれる民衆がいなかったことがそれを証明している。特に注目すべきは、劉氏宗室が民間人社会に転落してから、しばしば地方官吏に凌辱され、窮迫した立場に置かれたことである。その真相について『正史』の著者たちは黙して語らないが、それを窺える史料がないとは言えない。『続漢書』の記録(『後漢書』安成孝侯賜列伝、李賢の注に引く)によると、

王莽の時、諸劉は抑廢せられ、郡県の侵す所と為る。蔡陽国の釜侯の亭長は酔いて更始の父

²⁴ 『後漢書』光武帝紀。

²⁵ 『後漢書』光武帝紀に、李賢の注に『東觀記』を引く。

²⁶ 『後漢書』宗室四王三侯列伝。

の子張を誦る。子張怒り、亭長を刺殺す。後十餘歳にして、亭長の子報いて更始の弟の騫を殺す。賜の兄の顛、為に怨に報いんと欲し、賓客転た人を劫す。発覚して、州郡は顛を獄中に殺す。賜は顛の子の信と与に客の陳政等九人を結び、燔焼して亭長の妻子四人を殺す。

(王莽時諸劉抑廢、為郡県所侵。蔡陽國釜亭侯長醉誦更始父子張、子張怒、刺殺亭長。後十餘歳、亭長子報殺更始弟騫。賜兄顛欲為報怨、賓客転劫人、發覚、州郡殺顛獄中。賜與顛子信結客陳政等九人、燔焼殺亭長妻子四人。)

また、『後漢書』劉玄列伝に、李賢の注に『帝王世紀』を引いて、

春陵戴侯熊渠は蒼梧太守利を生み、利は子張を生み、平林の何氏の女を納れて更始を生む。

(春陵戴侯熊渠生蒼梧太守利、利生子張、納平林何氏女、生更始。)

更始はすなわち劉玄である。また、『後漢書』劉玄列伝には、

劉玄、字は聖公、光武の族兄なり、弟、人の殺す所と為り、聖公は客を結んで之に報いんと欲す。客、法を犯し、聖公は吏を平林に避く。吏、聖公の父の子張を繫く。聖公死を詐り、人をして喪を持して春陵に歸らしむ。吏乃ち子張を出し、聖公因って自ら逃れ匿る。」

(劉玄字聖公、光武族兄也、弟為人所殺、聖公結客欲報之。客犯法、聖公避吏於平林。吏繫聖公父子張。聖公詐死、使人持喪歸春陵、吏乃出子張、聖公因自逃匿。)

とある。

以上の史料によって分かることは、第一に、更始劉玄の一族は、曾祖父は春陵戴侯劉熊渠、祖父は蒼梧太守劉利であったが、王莽に爵位や官職を剥奪されたあと、父の劉子張以後からは普通の庶民になった。第二に、朝廷が「諸劉を抑廢」してから、「諸劉」はしばしば地方官吏に圧迫された。彼らは亭侯長に「醉誦」されたり、「獄中」で殺されたりした。第三に、「郡県所侵」に耐えられない劉氏は、抵抗したことはあったが、結果として「詐死」「避吏」「逃匿」しかなかった。結局「盜賊」に占拠されている地域に亡命することになる。このような三段階を経てたどったその運命は、当時の没落した劉氏宗室がどのような立場に追い込まれていたのかということを示す真の実像ではないだろうか。

ここにある劉玄の「避吏於平林」と同じような史料にはまた劉秀の「避吏新野」や劉賜・劉信の「結客報吏、皆亡命逃伏」などがある。これらの史料をまとめて考えると、彼らがなぜ後に王莽政權に対して徹底抗戦に立ち上ることを決意したのかは自明であろう。

3、反莽戦争の指導者としての劉氏

新莽政權を打倒した諸勢力のリーダーについて飢民説²⁷や豪族説²⁸もあるが、本稿で劉氏宗室説

²⁷ 漆侠『秦漢農民戦争史』生活・读书・新知三联書店1962年6月初版、1979年9月再版を参照。

²⁸ 楊聯陞「東漢的豪族」『清華學報』11卷、4期、1936年、宇都宮清吉「劉秀と南陽」『漢代社会經濟史研究』、弘文堂出版、昭和30年を参照。

を提案したい。各地方で迫害を受けた没落宗室は、ちょうどその時民衆が王莽の改革に対して失望を抱き「人心渙を思う」という心理が社会に広まったのを利用して、経済目標による飢民の乱をしだいに宗室の漢政権回復という政治目標に導いていった。

王莽の新王朝を覆したこの戦争は一体誰に指導されたのか。飢民でもなく、豪族でもなく、士大夫でも官僚でもなく、それは新莽より激しく弾圧された旧劉氏宗室であった。

王莽末期に起った緑林・赤眉という農民暴動は、大体において大飢饉の年に起った飢民の蜂起である。したがって、彼らは真っ先に蜂起したが、終始政権の取得を自分達の政治目標とは考えなかった。地方豪族は確かに王莽の経済改革により深刻な打撃を受けたが、後に王莽がある程度の譲歩を行ったので、地方豪族は経済上の権利を握ることができればそれでよく、特に政権交代までは望まなかった。故に彼らは反莽戦争に積極的に協力はしたが、指導者のような政治的野望はなかった。士大夫官僚は新莽政権中に位置を占め、彼らの大多数はむしろ以前の前漢朝廷よりもさらに重要視されたとも言えるので、一部少数派の造反はあったものの、王莽政権打倒の主角とはならなかった。

しかし、当時の旧劉氏宗室は特別な存在であった。上文にも述べたように新政権に投降した旧劉氏はすでに王氏一族のメンバーになり抵抗力を失ったが、大多数の旧劉氏宗室は庶民社会に転落して、経済面はもちろん、人格的にも「郡県の侵す所と為」り、「常に憤憤として社稷を復せんの慮を懐」くという態度をとっていた。したがって、飢民が暴動を起した時にはすでに彼らは後へは引けない状態で反莽戦争に身を投じていた。このことから旧劉氏宗室は一段と反莽戦争の指導者たる位置を占めたのである。

王莽期の末、農民蜂起の主な原因は自然災害であって、当時

天下は連歳災蝗あり、寇盜蜂起す。

(天下連歳災蝗、寇盜鋒起。²⁹)

南方は飢饉あり、人庶群がって野沢に入り、鳧苳を掘って之を食らい、更も相い侵し奪う。

(南方飢饉、人庶群入野澤、掘鳧苳而食之、更相侵奪。³⁰)

赤眉の力子都・樊崇等は、饑饉を以て相聚る。琅邪に起って、転じて鈔掠し、衆は皆な萬數なり。

(赤眉力子都、樊崇等以饑饉相聚、起於琅邪、轉鈔掠、衆皆萬數。³¹)

という状況であった。

大飢饉の農民暴動であるから、本来は飢えと寒えのために流賊になったのである。飢民武装勢力は衣食が得られることだけを願い、別に政権を狙う政治目的はなかった。故に、彼らは都市を占領したり、土地を略奪したり、長距離遠征したりすることもなかった。そのときの飢民武装勢

²⁹ 『後漢書』光武帝紀。

³⁰ 『後漢書』劉玄列伝。

³¹ 『漢書』王莽伝下。

力について、『漢書』『後漢書』に次のように記されている。

『漢書』王莽伝下にいる、

初め四方皆飢寒の窮愁を以て、起って盜賊と為り、稍稍に群聚し、常に歲熟は郷里に歸るを得んと思う。衆は萬を数うと雖も、亶だ巨人・従事・三老・祭酒と稱し、敢えて城 邑を略有せず、転掠して食を求め、日闕きて已む。

(初、四方皆以飢寒窮愁起為盜賊、稍稍群聚、常思歲熟得歸郷里。衆雖萬數、亶稱巨人・従事・三老・祭酒、不敢略有城邑、轉掠求食、日闕而已。)

師古曰く

闕は、尽なり。日に隨いて尽きるなり。

(闕、尽也。隨日而盡也。)

『後漢書』劉盆子伝にいる。

赤眉の衆は数々戦^{しばしば}いて勝つと雖も、而れども疲敝して兵に厭き、皆な日夜に愁い泣きて東に帰らんことを思い欲す。

(赤眉衆雖數戰勝、而疲敝厭兵、皆日夜愁泣、思欲東歸。)

飢饉のために起きた流民暴動は、旧劉氏宗室にとって復活できる見逃せない絶好の機会であった。飢民の暴動と違い旧宗室の造反は、初めから自分達の政治目的がはっきりしていたのである。劉續の以下の話は彼らの新莽朝廷を倒し、劉氏の政権を回復しようという気持ちをよく表わしている。彼は諸「豪傑」を集め、挙兵を謀って以下のように言った。

王莽は暴虐、百姓は分崩す。今、枯旱すること連年、兵革並び起る。此れ亦た天亡ぼすの時、高祖の業を復し、万世を定むるの秋なり。

(「王莽暴虐百姓分崩。今枯旱連年、兵革並起。此亦天亡之時、復高祖之業、定萬世之秋也。」³²)

旧宗室が兵を挙げたのは政治的な事件であって、それは流民の経済を理由とする暴動とはかなり違うものである。大望を抱いている彼らはしばしば父子や兄弟一族で出陣し、生死を物ともせず断固として官軍と戦った。例えば、劉續・劉秀の一族の例を挙げると、彼らは兵を興した初期、叔父の劉良や族兄の劉賜、姪の劉祉兄弟、義兄の鄧晨などすべて「相率いて軍に従」(「相率従軍」) った。したがって、彼らは身命を捨てていたのである。それは

姊の元と弟の仲は皆な害に遇い、宗従の死者数十人

(姊元、弟仲皆遇害、宗従死者数十人)、

(劉) 良の妻及び二子皆な害せらる

((劉) 良妻及二子皆被害。)

という情況に表れている。劉祉兄弟は従軍したあと、

³² 『後漢書』齊武王續列伝。

甄阜は尽く其の母弟妻子を殺す。

(甄阜盡殺其母弟妻子。³³)

という結果になってしまった。このような犠牲を払うことになったにもかかわらず、彼らは動揺しなかった。彼らは一旦新朝と闘争を始めてしまったことで、自らの退路を断ってしまったのである。

飢民と旧宗室との連合武装勢力に直面して、王莽は飢民の造反は怖くないが、劉氏武装勢力が民衆を利用して朝廷を攻めるという事態は非常に深刻であることをはっきり知っていた。『漢書』王莽伝下にいう。

初、京師青・徐賊衆は数十万人ありと聞くも、^{ついで}訖に文・号・旌旗・表識なく、咸な之を怪異す。好事者竊かに言えらく「これ豈に古えの三皇に文書・号諡なかりしが如きか。」と。莽もまた心に怪しみ、以て群臣に問う。群臣對うる無し。唯だ嚴尤曰く「これ怪しむに足らざるなり。黄帝・湯・武の師を行う自り、必ず部曲・旌旗・号令をそな待うる。今、これ有るなき者は、直だ飢寒の群盜、犬羊相聚るにして、之を爲すを知らざるなり。」と。莽は大いに説び、群臣尽く服す。後漢の兵劉伯升の起つに及び、皆な將軍と稱し、城を攻め地を略し、すでに甄阜を殺すや、移書して稱説す。莽は之を聞き憂懼す。

(初、京師聞青・徐賊衆數十萬人、訖無文號旌旗表識、咸怪異之。好事者竊言「此豈如古三皇無文書號諡邪。」莽亦心怪、以問群臣、群臣莫對。唯嚴尤曰「此不足怪也。自黄帝・湯・武行師、必待部曲旌旗號令、今此無有者、直飢寒群盜、犬羊相聚、不知爲之耳。」莽大説、群臣盡服。及後漢兵劉伯升起、皆稱將軍、攻城略地、既殺甄阜、移書稱説。莽聞之憂懼。)

このように王莽の旧劉氏の武装勢力に対する態度は、赤眉に対するものとはかなり違うのである。『後漢書』齊武王續列伝にいうように、

伯升(即ち劉續)遂に進んで宛を囲み、自ら柱天大將軍と号す。王莽は素より其の名を聞きたれば、大いに震え懼れて、伯升を邑五萬戸、黄金十萬斤、位上公に購う。長安中の官署及び天下の郷亭をして皆な伯升の像を塾に画いて、旦ごとに起ちて之を射せしむ。

(伯升遂進圍宛、自號柱天大將軍。王莽素聞其名、大震懼、購伯升邑五萬戸、黄金十萬斤、位上公。使長安中官署及天下郷亭皆画伯升像於塾、旦起射之。)

ということである。

劉氏の反莽集団は過去の失敗に鑑み、民衆の支持がなければ反莽戦争を成功させる見込みが少ないのをよく知っていた。故に、彼らは「人心は漢を思う」という社会心理に順応して、「漢家は復興す」という讖言を輿論としてうまく利用し、民衆の支持を得て、ついに反莽戦争の指導者となったのである。下江兵の領袖王常は初めて劉續・劉秀と会った時、すぐに「大悟」して、言うには、

³³『後漢書』宗室四王三侯列伝。

夫れ民の怨む所の者は天の去る所なり、民の思う所の者は天の与する所なり。大事を挙げんには必ず^{まさ}下に民の心に^{したが}順い、上は天の意に^{かな}合うべく、功乃ち成る可し。」

(夫民所怨者、天所去也。民所思想者、天所與也。舉大事必當下順民心、上合天意、功乃可成。³⁴)

と。そして、彼は下江兵を率いて漢軍と連合し劉氏の指導を受けることにした。「順民心」は即ち社会心理に應ずることであり、「合天意」は即ち讖言符命に適うことである。劉氏宗室はまさにこの二点によって民衆の信頼を得たのである。

新莽王朝の初期、幾度となく起った劉氏の反乱が民衆の呼応を受けなかったことから、当時の民衆はまだ新の政權に希望を抱いていたと考えられる。しかし、王莽の改革は失敗に帰し、民衆の失望を引き起した。

天下連歳災蝗あって、寇盜鋒起す。

(天下連歳災蝗、寇盜鋒起³⁵)

という厳しい現実³⁶に直面して、民心は急速に変化して、懐旧の思いが生れてきた。

新莽末期の「人心思漢」という社会心理は当時の一般的な思潮であった。それは恐らく史学家によって作られた虚像ではない³⁶。例えば、馮衍曰く

今海内潰乱し、人、漢の徳を懐う。

(今海内潰亂、人懷漢徳。³⁷)

馮異曰く

天下^{ひと}同しく王氏に苦しみ、漢を思うこと久し。

(天下同苦王氏、思漢久矣。³⁸)

班彪曰く

百姓謳吟して、漢の徳を思い仰ぐ。

(百姓謳吟、思仰漢徳。³⁹)

隗囂曰く

但だ愚人の劉氏の姓号を習識するの故を見、漢家の復興を謂うは疏なり。

(但見愚人習識劉氏姓號之故、而謂漢家復興、疏矣。⁴⁰)

というものがある。隗囂は民衆の「習識劉氏姓號」という心理と劉氏の「漢家復興」という輿論

³⁴ 『後漢書』王常列伝。

³⁵ 『後漢書』光武帝紀。

³⁶ 呂思勉氏の『秦漢史』新室始末にいう。「謂人心思漢者、乃班氏父子之私言、非天下之公言也。」と。しかし、本稿のまとめによると、王莽末には「謂人心思漢」の史料が多いので、恐らく呂氏の言った「班氏父子之私言」ではないと思われる。

³⁷ 『後漢書』馮衍伝。

³⁸ 『後漢書』馮異伝。

³⁹ 『後漢書』班彪伝。

⁴⁰ 『後漢書』班彪列伝。

を別物として見分ける眼力があつたのである。言い換えると、彼は「人懐漢徳」という民衆の「習識」を利用して「漢家復興」という輿論を作り上げた事実を見破つたのである。

前・後漢代の間には、讖言の作成によって輿論を作つたのは政治家たちの常套手段であつた。王莽は民衆が前漢に失望した心理を利用して、「改徳」の符命を作つて⁴¹、ついに漢の政権にとって代わつた。劉氏も同じく、「人心思漢」という社会心理に順応して、「再受命」「復興」などの讖言を作り出した。旧劉氏らが主張する論理は、漢の国家は確かに一度「中衰」したが、漢運というものは「再受命」すれば、「復興」するものであり、故に劉氏の皇帝が位を王氏に禅譲する必要は全くなかつたというものである。この「再受命」の讖言によって作つた輿論は、民衆たちになぜ新朝の打倒と劉氏の「中興」とが必然的につながつて実現しなければならないのかを説明する効果があつた。

初めの「再受命」の予言は、哀帝の建平二年(前5年)に生まれた。当時、夏賀良が作つた『赤精子讖』にいう。

漢家は中衰を歴運し、当に再び受命せん

(漢家歴運中衰、當再受命⁴²)。

それから二十五年あとの地皇元年(紀元20年)占星術師の鄧渾は言つた。

漢は必ず再び受命し、福は有徳に歸す。如し天に順つて策を発する者有らば、必ず大功を成さん。

(漢必再受命、福歸有徳。如有順天發策者、必成大功。⁴³)

翌年、卜者の王況は「漢家は当り復興す」(漢家當復興)と言つて、十余万字の讖書を作つた⁴⁴。更始元年、道士の西門君恵は讖記によつて「劉氏は当に復興せん」と言つた。また、劉秀の称帝の根拠となつた『赤伏符』には、

劉秀は兵を發して不道を捕えん、四夷雲集して龍野に闘わん、四七の際、火主と為らん

(劉秀發兵捕不道、四夷雲集龍闘野、四七之際火為主⁴⁵)。

「讖言を作」ることによつて「民心に順ふ」ということは、莽末には公然の秘密であつた。しかし「民心に順ふ」目的は民力を借りるためであろう。実は、「讖言を作」ることによつて「民心に順ふ」、つまり民力を借りたことは、劉氏が反莽戦争に勝つた要因の一つであると考えられる。劉玄は緑林軍に依つて称帝し、劉秀は南陽・河北の豪族に頼つて登極し、劉盆子は赤眉軍を以つて即位したことは、いずれも「民心に順ふ」ことによつて民力を借りた結果である。逆に、王莽が称帝した前後の宗室の反莽抗争がしばしば失敗した原因は、民心に順応できなかつたため、借り得る民力もなかつたからではないだろうか。

⁴¹ 顧頡剛氏『漢代學術史略』漢的改徳(東方出版社、2005年)を参照。

⁴² 『漢書』哀帝紀。

⁴³ 『漢書』王莽伝下。

⁴⁴ 『漢書』王莽伝下。

⁴⁵ 『後漢書』光武帝紀。

民心を得る者は天下を得、民心を失う者は天下を失う

(得民心者得天下、失民心者失天下)

という古諺があるが、いま劉氏の「復興」を見ると、その古訓を「民心を得る者は民力を借りて天下を得、民心を失う者は民力を喪いて、天下を失う」(得民心者借民力而得天下、失民心者喪民力而失天下)と理解できるであろう。だが、古えの人が「力」という言葉の明言を避けたのは、やはり天下に動乱を起さることを恐れたからであり、趙翼氏が

見るべし、是時、人心、漢を思うこと、天下を挙げて、謀らずして同じきことを。是を以て光武、天下を得るの易く、兵を起して三年ならず、遂に帝位に登る。古未だ此の如きの速かなる者有らず。民心の願う所に因る、故に力を為し易きなり。

(可見是時人心思漢、舉天下不謀而同。是以光武得天下之易、起兵不三年、遂登帝位、古未有如此之速者。因民心之所願、故易為力也。⁴⁶)

と述べているように「民心」を「力を為し易き」という道理としてはっきり指摘したことは、優れたところである。

莽末の飢民暴動は、秦末陳勝の乱や後漢末黄巾の乱と比べると、その闘争の水準はあまり高く評価できない。その主な理由は飢民暴動が終始独自の政権を成立させなかったからである。確かに赤眉軍は東から西まで九年に渡って戦争し、緑林軍に学んで十五歳の宗室劉盆子を皇帝として立てたが、根拠地を持たずに流動的に闘うに過ぎなかった。また二度も京師の長安に攻め入ったものの「入掠酒肉、互相殺傷」して、すぐに「引而東歸」し、最後まで戦争による何らかの政治目標も立てなかった。地皇四年(23年)二月、農民軍と宗室武装勢力とが連盟して更始政権を建てたことで、緑林軍の闘争水準が赤眉軍よりかなり高まったと考えられる。しかし、農民軍の指導者は宗室の劉玄を天子として推戴し、自ら戦争の指導権を劉氏宗室に譲った。

更始政権が成立してから僅か半年で、いち早く新莽政権を打倒したことは、劉氏宗室が農民軍を利用して成功を果したことを如実に物語っている。しかもその闘争を勝利まで導いた劉氏の代表者は、史家からよく賛美された劉續・劉秀ではなく、更始帝の劉玄だったのである⁴⁷。劉玄は決して『後漢書』にあるように「懦弱」と呼ばれる者ではないのである⁴⁸。もし史籍にある後漢建国皇帝への阿諛や成王敗寇(勝者は王となり、敗者は賊といわれる)という判断基準を避ければ、打倒王莽の戦争中、劉玄はよく農民軍と結束していたので、彼の史的な役割は劉續・劉秀よりもすばらしいと認めなければならないのである。

まず、劉玄は新政権の中で、最も農民軍に推戴された宗室成員である。地皇四年(23年)正月、

⁴⁶ 『廿二史劄記』卷三には「王莽時起兵者皆稱後漢」とある。

⁴⁷ 正史の記載によって更始帝劉玄は前漢のラスト・エンペラーである。「更始帝、著紀以漢宗室滅王莽、即位二年。赤眉賊立宗室劉盆子、滅更始帝。自漢元年訖更始二年、凡二百三十歳。」『漢書』律曆志下。

⁴⁸ 劉知幾は『史通』にいう。「案『後漢書』更始傳稱其懦弱也、其初即位、南面立、朝群臣、羞愧流汗、刮席不敢視。夫以聖公身在微賤、已能結客報讐、避難録林、名為豪傑。安有貴為人主、而反至于斯者乎？將作者曲筆阿時、獨成光武之美；諛言媚主、用雪伯升之怨也。且中興之史、出自『東觀』、或明皇所定、或馬后攸刊、而炎祚靈長、簡書莫改、遂使他姓追遷」空傳偽録者矣。」(『史通』曲筆。)

新市・平林・下江・春陵の四つの武装勢力は初めて「漢軍」として連盟して、甌阜・梁丘賜の「精兵十萬」を潰した⁴⁹。その勝利は更始政權樹立の基礎を固めただけでなく、宗室と農民軍とが正式な連盟を結んだことにより、以後緑林軍の武装勢力は攻撃の矛先を直接新莽政府に向けた。その意義は非常に重要である。両『漢書』にはこの戦役の勝利について劉續・劉秀の指導者的役割を誇調したが、少なくとも次の二点は疑いがないと思われる。一つ目は、『東觀漢記』劉玄伝に

漢軍は新市・平林を以て本と為す。

(漢軍以新市、平林為本。)

とあるように、劉續・劉秀兄弟の率いた春陵兵は人数的には主力部隊ではないという点と、二つ目は、劉玄がその戦役に「更始將軍」と称したことが事実であるという点である。その後まもなく

諸將は遂に共に議して更始を立てて天子と為す。

(諸將遂共議立更始為天子⁵⁰)

ということから考えれば、劉玄が、正月に政府軍を滅ぼした戦役において「將軍」らしい役割があり、また彼の人となりをも農民軍によく「素習」⁵¹されていたため、ついに彼は漢軍主力の新市・平林諸兵の支持を受けたのだろう。

また、劉玄は「劉氏復興」という讖語を転じて現実とした第一人者であることを認めざるを得ない。彼は即位すると、劉氏の復興のために、少なくとも次の三つの措置をとった。一つ目は、更始政權の最高指導者部である七人の中に、劉氏宗室の三人を当てたことである。即ち劉玄・劉良・劉續など三人の宗室と王匡・王鳳・朱鮪・陳牧など農民領袖との共同政權を成立させた⁵²。二つ目は、各地方へ特使を派遣して劉氏政權の復活を宣告した上に「郡国を降」(「降郡國」)したことである⁵³。三つ目は、新政權ができてから四ヶ月目に、

入りて宛城に都し、尽く宗室及び諸將を封じ、列侯と為る者は百余人。

(入都宛城、盡封宗室及諸將、為列侯者百餘人。)⁵⁴

とし、ついに「劉氏復興」の夢を現実にし、全国の宗室反莽闘争に澁刺とした力を注入したことである。

また、更始政權は、緑林軍の財物を略奪する経済性闘争を宗室反莽の政治性闘争に取り入れた。これにより漢軍と莽軍とは二つの対抗的な政治武装勢力になった。劉氏宗室が新莽を打倒した最後の画期的な半年のなかで、劉玄の反闘争指導者という歴史的な地位は過小評価できないと考えられる。

⁴⁹ 『後漢書』齊武王續列伝。

⁵⁰ 『後漢書』劉玄伝。

⁵¹ 『東觀漢記』劉玄伝。

⁵² 『後漢書』劉玄伝。

⁵³ 『後漢書』耿純列伝。

⁵⁴ 『後漢書』劉玄伝。

4、「諸劉」の間における「内争」

漢政権を復興する戦争中、「諸劉」勢力間で、帝位争奪の激しい「宗室内争」が展開された。その「内争」は更始政権が建てられた際の劉玄と劉縯の内訌から、宗室の分裂と真偽の闘争時期へ、そしてさらに一つの新興皇族の誕生に至る過程である。さらに、「内争」の本質については「諸劉」が代表した幾多の集団間の利益をめぐる闘争であったことを言及したい。また更始政権の長安への遷都を分岐点として、前期の「内争」は劉玄が農民武装勢力を利用した「諸劉」との闘争であり、後期の「内争」は劉秀が豪族武装勢力を利用した「諸劉」との闘争であることも指摘したい。

後期の「内争」については次の一節に譲り、ここでは前期の「内争」について考察する。地皇四年(23年)二月、更始政権の樹立は、劉氏反莽の最終的な勝利への組織準備であり、さらに宗室内部闘争の開始でもある。権力の取得と争奪は永遠に双子の兄弟であると言えよう。劉玄の称帝がまだ準備段階のうちに、劉氏の内訌はすでに芽生えていた。言うまでもなく、劉縯は劉氏が復興してからの初代皇帝の重要性を知って、自分が即位条件を未だ備えていないと分かったので、劉玄にしばらく称帝を見合わせようと、次のように説得した。

諸將軍幸いに宗室を尊立せんと欲し、其の徳甚だ厚し。然れども愚鄙の見、窃かに未だ同じからざる有り。今、赤眉は青・徐に起こり、衆は数十万、南陽にて宗室を立てたりと聞かば、恐らく赤眉も復た立つる所有らん。此の如くんば、必ず將に内に争わんとす。今、王莽は未だ滅びず、而して宗室相い攻むれば、是れ天下を疑わしめて自ら権を損わん。莽を破る所以には非ざるなり。(中略)今且く王と称して以て号令せん。もし赤眉の立つる所の者賢なれば、相い率いて往きて之に従わん。若し立つる所無ければ、莽を破り、赤眉を降し、然る後に尊号を挙ぐとも亦た未だ晩からざるなり。

(諸將軍幸欲尊立宗室、其徳甚厚、然愚鄙之見、竊有未同。今赤眉起青・徐、衆數十萬、聞南陽立宗室、恐赤眉復有所立、如此、必將内争。今王莽未滅、而宗室相攻、是疑天下而自損權、非所以破莽也。(中略)今且稱王以號令。若赤眉所立者賢、相率而往從之。若無所立、破莽降赤眉、然後舉尊號、亦未晩也。⁵⁵)

劉縯の話から、彼は、劉玄を推戴したい諸將の主張に対し「未だ同じからざる有り」という状態であった。彼の、称帝せずに、いったん「称王」して、「賢者」を待つという提案は、明らかに劉玄には皇帝になる資格がない、自分こそ賢者であるという意味を示唆していた。しかし、劉縯の、いったん劉玄が称帝すれば、劉氏は「必將内争」「宗室相攻」となるという予測は間違いないと考える。劉玄にとって劉縯はむしろ「相攻」の主な敵であろう。しかも彼は自分の部下や宗人のなかには必ず「不服」を持つ者がいるのを分かっていたのではないか。例えば、彼の「部

⁵⁵『後漢書』齊武王縯列伝。

将宗人」の劉稷はこれまで

しばしば数々陣を陥れ囲みを潰し、勇は三軍に冠たり。

(數陷陣圍、勇冠三軍)

して、

更始立つと聞きて怒って曰く『本と兵を起して大事を凶りし者は、伯升兄弟なり。今、更始は何為る者ぞ邪』

(聞更始立、怒曰『本起兵圖大事者、伯升兄弟也、今更始何為者邪。』⁵⁶)

という劉稷の言葉から分かるように、当時、春陵兵・下江兵の中には劉玄の称帝に反対する雰囲気が強かった。

強敵を前にして、誕生したばかりの更始連合政権は分裂解体するか、速やかに反対派を弾圧するかという二つの選択肢のうち、後者を選んで、劉續・劉稷を殺害した。後の事情を見れば、劉玄の決定は反莽闘争に有利であった。また、その際、劉秀は長兄を殺されても動揺せず、大局を念頭においたという素質は、この後彼が領袖人物となった重要な条件であろう。

劉玄は「同室操戈」(味方同士が戦う)ことによって更始政権の安定を守ったが、その後の宗室分裂という悪い結果を引き起こしたとも言える。劉玄は宗室の「内争」を挑発し、自ら「中興」の君主という皇冠に「宗室相攻」の元凶という罵名を付け加えたも同然である。その時から元来、敢えて軽々しく劉氏であるとして称帝していなかった武装勢力も、公然と「更始政亂」⁵⁷を不満に思うという理由で宗室の団結を裂こうとして動き出したのである。当時、劉玄・劉望・劉永・王郎(劉子輿と自称する)・盧芳(劉文伯と自称する)・劉嬰・劉秀・劉盆子等八つの宗室を自称していた政権は帝を称した。違う形や異なる性格によって、八つの政権間に「宗室相攻」という複雑な情勢が現れた。その中で、最も強い者はやはり前期の劉玄政権と後期の劉秀政権であって、劉氏の間にあった「内争」とは、殆どこの二大政権と他の「諸劉」との間に激しく角逐していたことである。

更始元年(23年)六月に劉玄が劉續を殺害した後の二ヶ月未満で、真っ先に更始政権と離別したかったのは宗室の劉望(劉聖ともいう)である。『後漢書』劉玄列伝に、

前の鍾武侯の劉望、兵を起し、略して汝南を有つ。(中略)八月、望遂に自ら立ちて天子と為る。

(前鍾武侯劉望起兵、略有汝南(中略)八月、望遂自立為天子。)

とあり、言うまでもなく、劉望の「自立為天子」という行為は劉玄を怒らせた。劉玄は

十月、奮威大將軍劉信をして撃ちて劉望を汝南に殺さしめた。

(十月、使奮威大將軍劉信擊殺劉望於汝南)。

劉望のあと、続いて宗室の劉永も公然と独立してしまった。

⁵⁶ 同上。

⁵⁷ 『後漢書』劉玄列伝。

更始即位するや、永は先んじて洛陽に詣り、紹封せられて梁王と為り、睢陽に都す。永、更始の政の乱るるを聞き、遂に国に拠って兵を起し、(中略)攻めて濟陰、山陽、沛、楚、淮陽、汝南を下して凡そ二十八城を得たり。(中略)是の時、東海の人董憲は兵を起して其の郡に據り、而して張歩も亦た齊地を定む。永、使を遣わして憲を翼漢大將軍、歩を輔漢大將軍に拜し、^{とも}与に共に兵を連ね、遂に専ら東方に拠る。

(更始即位、永先詣洛陽、紹封為梁王、都睢陽。永聞更始政亂、遂據國起兵(中略)攻下濟陰・山陽・沛・楚・淮陽・汝南、凡得二十八城。(中略)是時東海人董憲起兵據其郡、而張歩亦定濟地。永遣使拜憲翼漢大將軍、歩輔漢大將軍、與共連兵、遂專據東方。⁵⁸⁾

勿論、劉永の「專據東方」は分裂の行為であるが、彼は更始に封じられた梁王の号を持ちつつも、あえて帝と称さなかった。したがって、その際、洛陽から長安までの遷都に没頭していた劉玄は特に措置を構じなかった。

前漢末、地方豪族の熟時期であって、その任侠性格を持つ豪族は当時によく「豪傑」「豪俠」と呼ばれて、彼らは反莽戦争のとき、非常に活躍したのである。まずは、新莽時代の「豪傑」についての史料を見よう。

光武薊徙り還り、范陽を過ぎ、命じて吏士を収め葬らしむ。中山に至って、諸將復た上奏して曰わく、「漢は王莽に遭い、宗廟は廢絶し、豪傑は憤怒し、兆人は塗炭す。

(光武從薊還、過范陽、命收葬吏士。至中山、諸將復上奏曰：「漢遭王莽、宗廟廢絶、豪傑憤怒、兆人塗炭。⁵⁹⁾

[更始2] 是の時、長安の^{まつりごと}政は乱れ、四方背叛す。梁王の劉永は命を睢陽に^{もつぱ}擅らし、公孫述は王を巴蜀に称し、李憲は自立して淮南王と為り、秦豊は自ら楚の黎王と号し、張歩は琅邪に起り、董憲は東海に起り、延岑は漢中に起り、田戎は夷陵に起り、並びに將帥を置いて、郡県を侵略す。

(〔更始2〕是時長安政亂、四方背叛。梁王劉永擅命睢陽、公孫述稱王巴蜀、李憲自立為淮南王、秦豊自號楚黎王、張歩起琅邪、董憲起東海、延岑起漢中、田戎起夷陵、並置將帥、侵略郡県。⁶⁰⁾

[更始元] 九月庚戌、三輔の豪傑共に王莽を誅し、首を伝えて宛に詣る。』(〔更始元〕九月庚戌、三輔豪傑共誅王莽、傳首詣宛。⁶¹⁾

反莽戦争のとき、「豪傑」という地方豪族は、政權交替を望む劉玄や劉秀政權も、飢饉のため起きた流民暴動の赤眉軍とも全く違っていた。彼らの一部は次の節に述べるように劉氏反莽政權の風下に支持者として立つことに甘んじたが、他の一部は地方政權を作るため、劉氏宗室を利用

⁵⁸⁾ 『後漢書』劉永列伝。

⁵⁹⁾ 『後漢書』光武帝紀上。

⁶⁰⁾ 『後漢書』光武帝紀上。

⁶¹⁾ 『後漢書』光武帝紀上。

したことはこの時代の特徴である。

「劉氏再受命」という時代の気風によって、各地方の武装勢力は徐々に劉氏宗室という看板を掲げれば、天下の号令できることをよく知るようになった。当時の彼らの気持ちについて、范曄は次のようにいう。

劉氏の再び命を受けしは、蓋し此を以てなる乎。數子の若き者は豈に國を有つはかりごとの遠き凶あらん哉。時の擾れ攘ぎたるに因って、苟めに恣縱のみたる耳。然れども猶お宗室に附仮するを以て、能く歲月の間に掘強たり。

(劉氏之再受命、蓋以此乎！若數子者、豈有國之遠圖哉！因時擾攘、苟恣縱而已耳、然猶以附假宗室、能掘強歲月之間。⁶²)

確かに范蔚宗の言ったように、王・劉・張・李・彭・盧などは王莽末に国家を維持してゆく遠大な計画があまりなかったが、ほしいままに行動して、しばらくの横暴に振るまっていた原因は、漢の宗室であることにかこつけていたのである。范氏の「論」をさらに分析すれば、いくつかのポイントが挙げられる。一つ目は、ここに言う王・劉・張・李・彭・盧などは、皆な当時の「豪傑」であって、彼らは流民の暴動と異なり地方政権を作ったこと。二つ目は、「豪傑」が地方政権を作った目的は、新たな全国統一政権を目指す劉玄・劉秀政権と異なり、割拠することを望んだこと。三つ目は、「宗室に附仮する」のは、ただ割拠政権を作る手段なので、劉氏宗室自体が本物か偽者かは大した問題ではないことである。

さて、范氏が言った人たちのなか、一二の例を挙げてみると、

王昌、一名は郎、趙国邯鄲の人なり。素は卜相もとの工た為りて星歴に明るく、常に以為えらく、河北に天子の氣有りと。時に趙繆王の子の林は奇數を好み、趙、魏の間に任俠たりて多く豪猾に通じ、而して郎は之と親善たり。初め王莽の位を纂うばうや、長安中に自ら成帝の子おもの子おもと稱する者あ或まつて、莽之を殺す。郎は是れに縁よつて詐いつわつて真の子おもと稱し、(中略)林等愈々動じて疑まどい惑まどい、乃ち趙国の大豪の李育、張參等と謀はかりごとを通じ、共に郎を立てんことを規はかる。會たまたま人間に赤眉將まさに河を度らんとすと伝う。林等此に因まつて赤眉當まさに至るべしと宣言し、劉子輿を立てて以て衆の心を觀うかがうに、百姓多く之を信ず。更始元年十二月、林等遂に車騎數百ひきを率あしたい、晨に邯鄲城に入りて、王宮に止まり、郎を立てて天子と為す。

(王昌一名郎、趙國邯鄲人也。素為卜相工、明星歴、常以為河北有天子氣。時趙繆王子林好奇數、任俠於趙・魏間、多通豪猾、而郎與之親善。初、王莽纂位、長安中或自稱成帝子子輿者、莽殺之。郎縁是詐稱眞子輿、(中略)林等愈動疑惑。乃與趙國大豪李育・張參等通謀、規共立郎。會人間傳赤眉將度河、林等因此宣言赤眉當〔至〕、立劉子輿以觀衆心、百姓多信之。更始元年十二月、林等遂率車騎數百、晨入邯鄲城、止於王宮、立郎為天子。)

翌年、劉秀の攻撃を受け、「郎、数々出でて戦うも利あらず。乃ち其の諫議大夫杜威をして節を

⁶²『後漢書』王劉張李彭盧列伝論。

持ちて降らんことを請わしむ。威雅より郎は実に成帝の遺体なりと称す。光武曰わく、
設い成帝をして復た生まれしむるとも、天下は得る可からず。況んや子輿を詐る者を乎。
威、万户侯を請い求む。光武曰わく「願うに身を全くすることを得ば可なり」。(中略) 急ぎ
之を攻むること二十餘日。郎の少傅の李立、反間を為き、門を開いて漢の兵を内る。遂に邯
鄲を抜く。郎は夜に亡れ走って道に死し、追って之を斬る。

(郎數出戰不利、乃使其諫議大夫杜威持節請降。威雅稱郎實成帝遺體。光武曰「設使成帝復
生、天下不可得、況詐子輿者乎！」威請求萬戶侯。光武曰「願得全身可矣。」(中略) 急攻之、
二十餘日、郎少傅李立為反間、開門内漢兵、遂拔邯鄲。郎夜亡走、道死、追斬之。⁶³)

劉秀の杜威へ話から分かったのは、王郎政権を消滅しなければならない理由は、別に彼が自
称した宗室の本物や偽者とは関係なく、「天子」を称したことである。次に、帝を自称していな
かった盧芳の例を見よう。

盧芳、字は君期、安定三水の人なり。左谷の中に居る。王莽の時、天下咸な漢の徳を思い、
芳は是れに由つて詐つて自ら武帝の曾孫の劉文伯なりと称す。(中略) 王莽の末、乃ち三水
の属国の羌胡と与に兵を起す。更始の長安に至るや、芳を徴して騎都尉と為し、安定より以
西を鎮撫せしむ。更始敗るるや、三水の豪傑は共に計議して以えらく、芳は劉氏の子孫、宜
しく宗廟を承くべしと。乃ち共に芳を立てて上將軍、西平王と為し、使をして西羌、匈奴と
結んで和親せしむ。

(盧芳字君期、安定三水人也、居左谷中、王莽時、天下咸思漢德、芳由是詐自稱武帝曾孫劉
文伯。(中略) 王莽末、乃與三水属國羌胡起兵。更始至長安、徴芳為騎都尉、使鎮撫安定以
西。更始敗、三水豪傑共計議、以芳劉氏子孫、宜承宗廟、乃共立芳為上將軍・西平王、使使
與西羌・匈奴結和親。)

盧芳は、偽宗室にもかかわらず、帝を称していないので、更始政権の一員と認められた。後に
当地の割拠勢力になった例である。

反して、真の宗室にもかかわらず、帝を称すれば必ず更始政権の敵とみなして断行して削除を
おこなった例もあった。例えば、更始の三年正月、

平陵の人方望、前の孺子の劉嬰を立てて天子と為す。初め望は更始の政の乱るを見て、其の
必ず敗れんことを度り、安陵の人弓林等に謂いて曰わく「前の定安公嬰は平帝の嗣にして、
王莽篡奪すると雖も、而れども嘗つて漢の主と為る。今皆な云わく、劉氏の真人当に更めて
命を受くべしと。共に大功を定めんと欲す。何如」。林等之を然りとす。乃ち長安に於いて
求めて嬰を得、將いて臨涇(今日の甘肅省鎮原)に至つて之を立つ。党を聚むること数千人。
(中略) 更始、李松を遣わして討難將軍蘇茂等と与に撃破せしめ、皆な之を斬る。

(平陵人方望立前孺子劉嬰為天子。初、望見更始政亂、度其必敗、謂安陵人弓林等曰『前定

⁶³ 『後漢書』王劉張李彭盧列伝。

安公嬰、平帝之嗣、雖王莽篡奪、而嘗為漢主。今皆云劉氏真人、當更受命、欲共定大功、何如。』林等然之、乃於長安求得嬰、將到臨涇立之。聚黨數千人（中略）更始遣李松與討難將軍蘇茂等擊破、皆斬之。⁶⁴

とある。

劉玄は劉嬰の政権を滅ぼしたあと、自分自身も宗室における「内争」の為に犠牲になる時期が間近に迫っていた。更始三年(25年)の前半、赤眉軍が長安に侵入した緑林軍に迫っていく態勢となって、この二大農民武装勢力の衝突は避けられなくなった。六月、彼らは鄭県（今日の陝西省華県）に侵入したとき、近いうちに行われる緑林軍との大決戦への準備として正当な名分を得る為に、すでに別の劉氏を擁立する必要があると議論していた。当時、彼らは

今、將軍は百万の衆を擁し、西のかた帝城に向かうも、而れども称号無く、名は羣賊^た為り。以て久しくす可からず。如かず、宗室を立て、義^{さしは}を挟さんで誅伐せんには。此を以て号令せば、誰か敢へて服せざらん。」と感じていた。

（據百萬之食、西向帝城、而無稱號、名為群賊、不可以久。不如立宗室、挾義誅伐。以此號令、誰敢不服。⁶⁵）

故に、彼らは牧童の劉盆子を天子として擁立し、自ら「建世」という国号を称した。これで、劉縯が死ぬ前に残した「赤眉復有所立、必將内争」という予言は、これで現実になった。その当時のことは『後漢書』にこのように記してある。

赤眉の劉盆子を立つるに及んで、更始は王匡、陳牧、成丹、趙萌をして新豊に屯せしめ、李松を擲に軍せしめて以て之を拒^{ふせ}ぐ。

（赤眉立劉盆子、更始使王匡・陳牧・成丹・趙萌屯新豊、李松軍擲、以拒之。⁶⁶）

そのあと、更始政権は内輪もめが起きて、一部の将領は赤眉軍へ身を寄せ、劉玄自ら敵に投降し、ついには殺される結末を迎えた。赤眉軍と緑林軍の間の併吞がなぜこのような宗室の「内争」の形で行なわれたのかと追究すると、当時における闘争策戦の一面があるけれども、やはり諸政治集団の間に後漢王朝の政権を目指す政権紛争という宗室の「内争」の本質によるものであろう。

5、「内争」による劉氏再生の実現

王莽から弾圧されたあと、劉氏宗族の反莽戦争から、双方はよく連携し、光武劉秀の

兄縯、字は伯昇、慷慨にして大節有り。王莽、漢を纂い、劉氏、抑廢せられ、常に興復の志有り、産業を事とせず、身を傾け、以て豪傑と結び、豪傑此れを以て之に歸す。

（兄縯、字伯昇、慷慨有大節。王莽纂漢、劉氏抑廢、常有興復之志、不事産業、傾身以結豪

⁶⁴ 『後漢書』劉玄列伝。

⁶⁵ 『後漢書』劉盆子列伝。

⁶⁶ 『後漢書』劉玄列伝。

傑、豪傑以此歸之。⁶⁷⁾

〔建武2〕 来歙、字は君叔、南陽新野の人なり。父の冲、哀帝の時諫議大夫と為り、世祖の姑を娶り、歙を生む。歙、才略有り、多くに通ず。慷慨にして大志有り、兄弟五人あるも、世祖独り之を親愛す。漢兵起き、王莽人をして諸劉の親屬を捕へしめ、歙を得て之を撃し、賓客共に歙を纂い出す。

〔〔建武2〕 来歙字君叔、南陽新野人。父冲、哀帝時為諫議大夫、娶世祖姑、生歙。歙有才略、多通、慷慨有大志、兄弟五人、而世祖獨親愛之。漢兵起、王莽使人捕諸劉親屬、得歙撃之、賓客共纂出歙。⁶⁸⁾

赤眉軍は「立宗室、挾義誅伐」という闘争によって当時最も有力だった更始政権を倒したが、自分自身の政権が強固なものではなかったのも、まもなくもう一つの劉氏宗室政権を作った劉秀に滅ぼられた。これによって「宗室内争」という闘争の核心勢力も更始政権の滅亡に従って、劉秀の建武政権に替わった。兄の劉績が劉玄に殺されたあと、劉秀は復讐できる力がなかったのも、不満を我慢して意を曲げても更始政権と折り合いをつけていった。しかし、彼と劉玄との間は、兄が殺害されたことを別にしても、そもそもこの二つの武装勢力の性格の違いが無視できないであろう。劉績・劉秀の兄弟は彼らの自家は前述したようにとくに地元の豪族とは言えないにもかかわらず、二人は南陽地域の豪族勢力の支えによって兵を起し、彼らが統率した舂陵兵は豪族武装の代表的な勢力だと考えられる。これとは異なり、緑林兵は単なる劉玄という旧宗室人物を擁立した農民武装勢力であると言える。本来、舂陵兵と緑林兵の合併は当時の二大勢力による共通の敵である王莽新朝を倒そうという共同目的によってできた豪族武装と農民武装との間の一時的な同盟であった。ゆえに、新朝政権が倒れてから舂陵と緑林両軍は連盟を維持してきた闘争目標がなくなったので、この二つ武装勢力の分裂は免れなくなった。劉秀が劉玄の更始政権から独立する機会を得たのは、劉玄の一つの誤算があったからである。それは更始の元年九月に新朝を倒したあとの翌月、劉玄は劉秀を新政権の特使として当時の河北地域に残った王莽の政府軍と地方軍閥を落ち着かせ慰めるために派遣した。その際、劉秀は劉氏宗室の身分を持つ新生更始政権の代表として、河北地域に入ったが、新朝の残存勢力や現地の農民軍からの抵抗は一切なかった。しかし彼に必死に抵抗し戦ったのはそこに割拠している別の劉氏宗室武装勢力であった。王莽末の乱から現地における卜者の王郎が漢成帝王子の劉子輿と偽り、さらにもとの趙繆国王子の劉林が王郎を天子として擁立し、都を邯鄲に定めた。又ここより北に400キロ離れる旧広陽国故地の薊県に活躍しているもとの王子劉接も自ら武装勢力を立ちあげ、邯鄲の劉氏宗室政権に応じていた。更始元年の十二月、劉秀の軍は邯鄲との間に位置する真定(今日の河北省正定県)に入ってから、外来の劉氏武装と現地の劉氏政権との間に、河北地域を支配する主導権争いが始まった。五ヶ月も経つ戦争は、外来人の劉秀としてはかなり困難なことからしい。初期に王郎は

⁶⁷⁾ 袁宏『後漢紀』後漢光武皇帝紀。

⁶⁸⁾ 袁宏『後漢紀』後漢光武皇帝紀。

檄を移して光武を十万户に購^{あがな}い

(移檄購光武十萬戸⁶⁹)、

劉秀はいたるところで包圍討伐され、散々な体たらくであって、一時あきらめて「将欲南歸⁷⁰」したかった時期もあった。ついに更始政權に期待していた一部の在地士大夫と豪族勢力の支持を得て、河北地方の宗室政權に圧制を加えたうえに、河北に根拠地を設けた。

のちに、更始政權は洛陽に都を移し、更始軍と赤眉軍とが激しく争ったとき、劉秀はゆっくり河北地方で勢力を蓄え、袖手傍観した。劉秀が河北地方で王郎政權に勝ったのはおそらく劉玄の警戒心を喚起したからであろう。ゆえに、

更始は侍御史を遣わし節を持ちて光武を立てて齊王と為し、悉く兵を罷^やめて行在所^{いた}に詣らしむ。光武は辞^{ことわ}るに河北の未だ平がざることを以てし、徴^{めし}に就かず。是れ自^より始めて更始に二あり。

(更始遣侍御史持節立光武為齊王、悉令罷兵詣行在所。光武辭以河北未平、不就徴。自是始貳於更始。⁷¹)

王郎を滅ぼした劉秀は河北に自分の根拠地を固め、さらに現地の銅馬軍という農民武装を勧誘し投降させ、ついに数十万兵の軍隊を率いることになった。「故に関西にて光武を号するに「銅馬帝」と為す。ここから、劉秀は一連の戦争によって河北全域を制覇し、又赤眉軍が大挙して函谷関を侵入して緑林軍と決戦したとき、「更始・赤眉の乱乗」じて公然に更始政權と分裂し、その支配地を奪い始めた。ついに更始三年(25年)六月、劉秀は鄴南(今日の河北省柏郷)で皇帝の位につき、漢の国号を称して、建武に改元した。

その後しばらくして洛陽に都を定め、後漢時代はここから始まった。劉玄が劉秀の兄の劉縯を殺害してから二年の間、劉秀は臥薪嘗胆し、艱難辛苦を重ね、ついに独立した宗室政權を作り出した。これで旧劉氏宗室の最終的な再生という任務は史的に劉秀の身に委れられた。

劉秀は帝と称したときには、ほぼ黄河の中、下流域の一部だけを制覇していたが、いまだ他の旧劉氏宗室を始めとして、各地方にある割拠武装勢力によって包圍された。いかに敵に勝つか、彼の戦略というのはまずほかの劉氏宗室政權を徹底的に殲滅し、そのうえで唯一の正統の宗室劉氏というリーダーとして諸異姓の割拠武装ごとに滅ぼしていくというものであった。更始政權が潰れてから劉秀政權と対抗できる宗室武装は東方にある劉永と西方の赤眉軍しかなかった。ゆえに、「先ず関東、後ち隴蜀」という計画の通り、劉秀の矛先の向かうところは真っ先にすでに三年もの間「專據東方」していた宗室の劉永である。劉永という人物は劉玄が帝と称したうちに東海郡の董憲や齊地を占めた張歩と連盟軍を作って東方に割拠していた。

更始敗るるに及んで、永自ら天子を称

⁶⁹ 『後漢書』光武帝紀。

⁷⁰ 『後漢書』耿弇列伝。

⁷¹ 『後漢書』光武帝紀。

(及更始敗、永自稱天子⁷²)

したので、劉秀がこれから全国を統一するという大業の障害となった。その際にもし劉永の勢力を放任すれば後顧の憂いが絶えなくなり、逆に戦機をつかめず戦いに勝てば東方の連合軍の主力を破壊し、董憲と張歩の最期を期して待つことができる。建武の二年夏(26年)、劉秀は將軍の蓋延に命じ、東へ劉永を征伐させ、「睢陽を囲みて、数月にして之を抜く」。劉永はいったんは逃げたが、翌年(27年)の春、再び睢陽入ることになった。ついに蓋延による百日間の包囲によって、劉永は食料が尽きたため、包囲を突破した途中で、自分の部将に殺させた。建武五年、劉秀の漢軍は垂恵(今日の安徽省蒙城)で劉永の残存勢力を全て殲滅した。劉永政権との戦いは三年を経て非常に苦しかったが、その後はただ一年間で、相次いで張歩・董憲・李憲など劉永の連合軍を滅ぼし、順調に関東全域を制覇した。これは劉秀の割拠勢力が劉氏宗室にメスを入れた東方戦略の正しさを裏付けただけではなく、今後西方地域へ進軍する堅固な後方ができたことを意味する。劉永との戦いと同時に、建武三年(27年)劉秀の漢軍は西方の劉盆子の赤眉軍と戦争をしたが、これはかなり迅速に勝利を迎えることができた。赤眉軍は再び長安に侵入しても都を作らず、いつでも故郷の関東へ戻るつもりであり、確かに宗室の劉盆子を帝と称していたが、統一的な国家政権を作ろうという目的が見られない。しかし、このような数十万人に上る農民軍を関東に帰らせたら、当然すでに実行していた劉秀の東方を制覇する戦略の妨害になる。ゆえに劉秀みずから兵を率いて食糧の欠乏から東方に引きあげる赤眉軍を宜陽(今日の河南省宜陽)に待ちうけてこれを降した。

その時までには、光武帝劉秀は西方地域で劉氏宗室を擁立した赤眉政権と東方地域の宗室劉永の政権をほぼ同時に倒したうえで、東方を安定し、西方へ隴西・巴蜀両地の軍閥を征服する道を開通し、九年後全国を統一する勝利の確信があったともいえよう。前漢の劉氏旧宗室は王莽末の乱で「宗室内争」という特殊な形式によって後漢の皇室へ変身したのである。

おわりに

前漢末期から後漢にかけての30年間には、前漢・新朝・後漢の三つの王朝を経て、劉王二氏の政権が交替をくりかえした。その間における劉氏宗室の衰敗から再生への曲折した経過について、『漢書』『後漢書』の記述は曖昧に終わっているので、今日まで漢代史研究の上で検討しなければならない課題となっている。

前漢末期や王莽時代における劉氏宗室の社会的地位について、筆者はこれまでの研究が高く評価している観点については賛成できない。これまで腐敗して、平民になり下っていた宗室は王莽の「奪爵」「奪官」「奪姓」等の弾圧によって、さらに没落してしまった。彼らが朝廷では自分の

⁷²『後漢書』劉永列伝。

劉姓さえ使えない官僚であり、地方では「郡や県の官吏に侵され」た庶民であった事実を解明した。彼らが反莽戦争に挺身した主な理由は、自分の政治的、社会的地位が満足できなかったことにあると考えられる。

新莽政権を打倒した諸勢力のリーダーについて飢民説や豪族説もあるが、本稿は劉氏宗室説を提出した。各地方で迫害を受けた没落宗室はちょうどその時民衆が王莽改制に対して失望を抱き「人心漢を思う」という社会心理がひろまったのを利用し、しだいに飢民之乱の経済目的を宗室漢政権の再生という政治目的に導いていった。

漢政権を回復する戦争の中で、「諸劉」勢力の間では、帝位を争奪する激しい「宗室内争」を展開した。本稿はその「内争」を全面的に考察し、それが更始政権が建てられた際の劉玄と劉縝の内訌から、宗室の分裂と真偽の闘争時期へ、そしてさらに一つの新興皇族の誕生に至る過程であることを指摘した。さらに進んで、「内争」の本質について、それは「諸劉」が代表した幾多の集団の間の利益をめぐる闘争であったことを主張し、また更始政権の長安への遷都を分水嶺として、前期の「内争」には劉玄の農民武装と「諸劉」との闘争という特徴があり、後期の「内争」には劉秀の豪族武装と「諸劉」との闘争という特徴があることも指摘した。

『漢書』諸侯王表及び王子侯表に見える王莽時代に絶した劉氏宗室一覧表

	爵名	継承	奪爵	出典
一	城陽王劉俚	永始元年、以哀王雲弟紹封。	莽篡位、貶為公、明年廢。	『漢書』諸侯王表
二	蕃川王劉永	建平四年、嗣懷王友位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
三	梁王劉音	元始五年、以孝王玄孫之曾孫封。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
四	代広宗王劉如意	元始二年、以孝王玄孫子封。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
五	河間王劉尚	建平二年、以孝王子嗣恵王良位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
六	魯王劉閔	建平三年、以頃王子郤郷侯封。	王莽篡位、貶為公、明年、献神書言莽徳、封列侯、賜姓王。	同上
七	江都広世王劉宮	元始二年、以易王庶孫盱眙侯子封。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
八	趙王劉隱	元延三年、嗣共王充位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
九	長沙王劉舜	居摂二年、嗣繆王魯人位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
十	中山広平王劉漢	建平三年、以夷王弟封。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
十一	広川広徳王劉赤	居摂元年、嗣静王榆位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上

十二	膠東王劉殷	永始三年、嗣恭王位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
十三	六安王劉育	陽朔二年、嗣頃王光位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
十四	常山真定王劉楊	綏和二年、嗣共王普位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
十五	常山泗水王劉靖	元廷三年、嗣戾王駿位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
十六	燕廣陽王劉嘉	建平四年、嗣思王璜位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
十七	廣陵王劉宏	居攝二年、嗣靖王守位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
十八	廣陵高密王劉慎	鴻嘉元年、嗣懷王寬位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
十九	淮陽王劉續	元壽二年、嗣文王玄位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
二十	楚王劉紆	元壽元年、嗣思王衍位。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
二一	信都王劉景	以孝王孫立為定陶王、奉恭王後、建平二年、徙信都。	王莽篡位、貶為公、明年廢。	同上
二二	德侯劉勳	元壽二年、以廣玄孫之孫長安公乘紹封。	王莽篡位、絕。	『漢書』 王子侯表
二三	臨衆侯劉商	嗣釐侯賢位。	王莽篡位、絕。	同上
二四	阿武侯劉長久	嗣頃侯黃位。	王莽篡位、絕。	同上
二五	州鄉侯劉禹	嗣恭侯伯位。	王莽篡位、絕。	同上
二六	羽康侯劉棄	嗣恭侯係位。	王莽篡位、絕。	同上
二七	利昌侯劉換	嗣刺侯殷位。	王莽篡位、絕。	同上
二八	公丘侯劉元	嗣思侯賞位。	王莽篡位、絕。	同上
二九	為氏節侯劉鄴	嗣孝侯漢強位。	王莽篡位、絕。	同上
三〇	安衆侯劉崇	嗣歎	居攝元年舉兵、為王莽所滅。	同上
三一	南城侯劉友	嗣頃侯遂位。	王莽篡位、絕。	同上
三二	臨樂侯劉廣都	嗣節侯萬年位。	王莽篡位、絕。	同上
三三	被陽侯劉廣	嗣節侯閔位。	王莽篡位、絕。	同上
三四	定侯劉乘	嗣恭侯湯位。	王莽篡位、絕。	同上
三五	稻侯劉永	嗣頃侯閔位。	王莽篡位、絕。	同上
三六	柳侯劉守	嗣繆侯軻位。	王莽篡位、絕。	同上
三七	雲侯劉得之	嗣釐侯終古位。	王莽篡位、絕。	同上
三八	牟平侯劉隆	嗣釐侯威位。	王莽篡位、絕。	同上
三九	樊輿侯劉自予	嗣頃侯土生位。	王莽篡位、絕。	同上
四〇	夫夷侯劉商	嗣懷侯福位。	王莽篡位、絕。	同上
四一	都梁侯劉佗人	嗣煬侯容位。	王莽篡位、絕。	同上
四二	衆陵侯劉骨	嗣頃侯慶位。	王莽篡位、絕。	同上
四三	葭葭侯劉永	嗣頃侯閔位。	王莽篡位、絕。	同上
四四	廣饒侯劉麟	嗣共侯坊位。	王莽篡位、絕。	同上
四五	餅侯劉閔	嗣原侯融位。	王莽篡位、絕。	同上
四六	皋虞侯劉樂	嗣頌侯顛位。	王莽篡位、絕。	同上
四七	魏其侯劉嘉	嗣質侯蟻位。	王莽篡位、絕。	同上